

テーマ：『故田中正治氏の歴史』

報告者：鳥取県／森安一彦

【故田中正治氏の歴史資料の取材経過】

4年前（1998年）、元気で存命中だった田中氏と出会い、関係人物や、ろうあ運動（活動）との係わりなどを取材予定だったが、資料紛失との事で、記憶をたどっての思い出話しの取材をした。

また、鳥取県立鳥取聾学校創立70周年記念誌などで田中氏とろうあ運動の係わりを取材し編集した。

【故田中正治氏のろうあ運動の歴史を取材して・・・】

下記の3人の関係が明らかになった。

- | | |
|-------------------|----------------|
| ①今西 孝雄（いまにし たかお） | } プロフィールP5～6参照 |
| ②大川 良臣（おおかわ よしおみ） | |
| ③藤田 威（ふじた たけし） | |

【故田中正治氏のろうあ運動の歴史】

①第2回全国ろうあ者大会開催

1951年（昭和26年）6月5日～6日、鳥取県での全国ろうあ者大会を浜村で開催。

－開催の経過－

第2回全国ろうあ者大会を広島県で開催することに決定していたが、事情があり開催が困難となる。開催予定日まで、わずか3ヶ月しかなく、他県も受け入れ状況が整っておらず大会はとても開催出来ない状態であった。そして、鳥取県に白羽の矢がたった。大会は無理だが、理事会・評議員会ならなってみよう－と県へ予算交渉した結果、「理事会・評議員会だけの大会に補助金は出せない・・・。」との回答であった。交渉を重ねた結果、「大会を開催するなら補助金を出す。」との事で急遽、理事会・評議員会だけではなく、全国ろうあ者大会を開催する事となった。

その土壇場の乗り切りの中心は藤田威氏と田中正治氏だった。

1948年（昭和23年）秋、ヘレン・ケラー女史の来日で、身体障害者への福祉行政が全国的に行われ始めた頃、鳥取県知事が欧米視察旅行で、福祉行政を大きく学び取ったことが田中正治氏の努力に加わり、ついに鳥取県から全国ろうあ者大会への多額の補助金

を得ることができた。

全日本聾啞連盟の幹部たちは、「この小さな貧乏県があればどの難しい大会を開催することが出来たとは、たいしたものだ。」と、あっけにとられ、またとても喜んだという。大会も大成功に終わった。

<「歳月・藤田威遺稿集」著者：藤田孝子（文中 追想文・大川良臣） を検討して>

鳥取県知事に補助金を陳情したが、拒否された。

知事は外遊で“青い鳥”を見つけたと新聞に大々的に掲載された。（青い鳥は幸せの意味であり、福祉にも大きく関わっている。）そんな中、補助金の陳情に行った田中正治氏は「知事がみつげられた青い鳥はどんな意味ですか？具体的に教えてください。」と尋ねた。知事は返答に困惑。即座に満額助成を決断した。こんなエピソードもあった。

急遽、鳥取県での全国大会を引き受けたのが3月で開催予定は6月。3ヶ月間大変悩みながら一生懸命活動した結果、県庁や農協など、補助を受ける事ができた。

全国ろうあ者大会に行政から補助金が出たのは、初めての事で、大きな成果をあげ無事成功できた。

<1998年存命中の田中氏と記憶をたどっての思い出話取材 より>

②身体障害者手帳の交付と年金制度の発案

身体障害者福祉法での運動は藤本が尽力したと言い伝えられることが多いが、その陰で支えた鳥取の田中正治氏の功績も大きい。藤本は、身体障害者福祉法の中の身体障害者更正施設としてのろうあ更正センター設立に腐心していたので、年金制度は後回しに考えていたのかもしれない。田中氏が藤本に、

「聾啞者の現状を見てほしい。みんな苦しんでいるではないか。聾啞者は勤めても障害者であるが故に十分な収入が少ない。健聴者は立派な会社に勤めて、きちんと収入を得ているではないか。そのような格差のある状況に対して、年金で保障するのは必要だ。」

と訴えた。藤本は田中氏の主張を理事会にかけることにし、可決され、障害者手帳交付や年金支給も目標とした活動が始まった。

田中正治氏

身体障害者手帳の発行を思い立ち、昭和二十三年の身体障害者福祉法制度の際、地元出身の故徳安実蔵代議士を通じて政界に働き掛け実現した。環境がえらい立派な方々に恵まれいろいろの難題に向け成立にタイミングが良かったのでしよう。

田中氏の発案としてろうあ者の皆さんは勤務する会社から健聴者より給料が大変安いので、家庭生活が出来ないようで大変心配されました。なんとか年金制度を作らなければならない。いろいろ運動した結果、昭和三十四年十一月一日から実施された。田中下のおかげでした。その

後政府との交渉は故木下孝一氏や故藤本敏文や故徳安実蔵氏が携わっていたようでした。運動に力を入れられ、田中氏と共通点があったため、いつも話が弾んだ。温厚なろうあ者のため、ろうあ運動にも尽力されたと高齢者から言われた。

※徳安実蔵氏は田中氏のお母さんの弟です。総務長官となり郵政大臣にもなられ中央政界との親友が多かったそうでした。

※木下孝一氏は小学校の教頭。耳が悪くなり難聴者となった。そして徳安氏の事務局長となり全日本身体障害者協会副会長となり、後に推されて会長となった方です。

※全日ろう連盟長(藤本敏文氏)やその他有力なろうあ者の方々との親友が多くあって、理事に推挙されたが、家の跡取りのため辞退されたそうです。

<「藤本敏文」編著者:那須英彰・須崎純一 発行所:筑波大学附属ろう学校同窓会 より抜粋>

※1998年1月17日、那須英彰氏(NHKニュースキャスター)から「故田中正治氏が身体障害者手帳関係などに対して色々運動し活動したと聞いたが、その状況を知りたい。」との申し出があり、私は、大川良臣氏へ取材し、その結果を報告した。その後、那須氏は大川氏へ再び確認の為取材した。

③ろうあ者による、ろうあ者の為の“木工企業組合”設立運動

ろうあ者はこの時代、職業の幅が狭かった。

その中で、ろうあ者が占めている職業が木工・農業・縫製で一定していたように思う。

田中氏は、人の世話をするのが大好きで、木工企業組合のろうあ者共同作業場設立運動に積極的に協力した。

この作業場は1952年(昭和27年)大火直後、難聴者・大田倫氏らが協力し、田中氏らを中心に設立運動を起こし、20万円を集めた。更に、24万円を後援金として各方面の援助を得た。その間、多くの困難にもめげず、1954年(昭和29年)8月下旬に、鳥取市瓦町の元鳥取専修学校教官である宮原恵一氏より土地の提供を受け、着工の運びとなった。そして、10月上旬完成。

この建物は、約15坪、モルタル塗りの、こじんまりとした建物で、内部にはロクロ4台・旋盤1台があり、大田氏の他3名のろうあ者と宮原氏及び下田清道氏が、丸椅子づくりに取りかかっていた。

“自分達の福利は自らの手で”と、ろうあ者だけで作り上げた全国でも珍しい鳥取木工企業組合のろうあ者共同作業場が操業を始めたのである。

しかし、資金不足で見本を送れず、貧乏のどん底にあえていた。そして、赤字続きとなり約5年で経営不振となり、倒産した。

④手話学級の設置に協力

1948年（昭和23年）、義務制実施と盲ろう分離によって児童生徒の数は急増した。聾学校長今西孝雄氏は、手話学級の設置に踏み切ると同時に、補聴器による難聴学級を編成した。

今西校長は、手話だけで教育された多くの卒業生が立派な社会人として活躍している事を知っていたので、職業教育の強化で腕を磨かせ、手話による学習で学力補強をやることとし、手話学級を作った。

これについて、職員の中に反対説があり、保護者の中にも多少の異論があったが、説得につとめ、田中氏・大川氏（当時、ろう学校教諭）の強力な支持もあり、今西校長は信念を持って実施に至った。

手話学級は、田中氏・大川氏の熱心な指導がつづいた為、今西校長は日に日に信念を固める結果となった。

⑤ろう学校作法室で挙式を実施

聴覚障害者に、職業を身につけさせて社会的に自立させ、そのうえで幸福な結婚をさせたい——というのが今西の基本的な考えとして一貫している。

聾学校長には世話好きな人が多く、卒業生の何組かの媒酌人をつとめたという人が数えきれないほどいるはずだが、今西の仲人の経験も多く、すでに五十組はこえているだろう。多いときは月に三組も式があった。なかにはすでに大学教授をしているものもある。この本にも今西が仲人をつとめた話が何ヶ所か出てくるはずだが、その第一号ともいえる挙式が昭和二十二年一月五日、鳥取校でおこなわれた。

同校の卒業生の一人、谷岡音蔵が、結婚相手もきまっているのだが、式の費用がなくて困っているという話を教師の田中正治がきいてきて、今西に伝えた。

「それなら会費持ち寄り制で、学校で式を挙げることにしてはどうだろうか」

ということになった。借りてきた金屏風が講堂にたてられ、今西は配給の酒を持参、準備いっさいは田中を先頭に教職員の手でとりしきられた。仲人の今西は、心から新郎新婦の門出を祝い、簡素ながらすばらしい結婚式であった。

<燃え尽きるまで—今西孝雄を語る— 著者：今西孝雄 より抜粋>

※ “聴覚障害者に、職業を身につけさせて社会的に自立させ、そのうえで幸福な結婚をさせたい—という今西の基本的な考えとして一貫している” …今西氏だけではなく、田中正治氏も同様の考え方であった。

※今西…今西孝雄（鳥取県立鳥取聾学校長）

※鳥取ろう学校での挙式は、谷岡音蔵氏の他に、大川良臣氏も行い、計2組である。

【関係者プロフィール】

■今西孝雄（いまにし たかお）

昭和21年6月鳥取県立鳥取盲聾学校長就任／当時35歳（全国一若い校長）

※今の知事公選制は昭和22年にスタートした。それまでは内務省が任免権をもつ官選知事で、鳥取県最後の官選知事が、林敬三であった。就任時が38歳。全国の地方長官中、一番若い知事であった。自身若い林知事が、とくに若い校長を希望し、強く今西を校長に推薦していた。

※昭和23年4月の義務制の実施で鳥取県立鳥取盲聾学校を廃し、盲・聾の2校に分離して新たに鳥取県立鳥取聾学校が設置され、今西が校長に補せられる。（校長／昭和21年～26年）

現在92歳。

■大川良臣（おおかわ よしおみ）

昭和18年3月～昭和58年3月—鳥取県立ろう学校教諭

※大川、田中の2人を助教として採用する。（2今西のすすめで認定講習を受け、教諭となる）母校で後進の指導に活躍した。

※鳥取県ろうあ協会副会長として、田中会長と長い間一緒に活動した。（田中会長の通訳として女房（秘書）のように大いに活躍）田中会長後任として1年間会長を務めた。

現在82歳。松江市在住

■藤田威（ふじた たけし）

田中正治氏の親友

昭和27年島根県立ろう学校助教諭／当時35歳

昭和28年浜田ろう学校へ転任

昭和35年助教諭から教諭へ昇級／当時43歳

<活動>

全日本聾連盟理事／中国聾連盟長

※卒業生や田中の強い要望で今西校長の同意を得、絵画技術を生かした職業を生徒に身に付けさせよう（生徒が絵画を通じて職業的自立をするため）と、ろうあ者（難聴者）の日本画家、藤田に交渉をはじめた—昭和25年頃／藤田は画家として芸術一筋に生きる気持ちは強く、なかなか承諾しなかった。昭和26年今西校長が鳥取聾学校を離任。後任の由本校長は藤田採用を拒否。

昭和47年9月30日、自宅にて死亡／55歳

■田中正治（たなか まさはる）

大正2年3月7日生／気高郡青谷町

3歳の時、中耳炎が悪化して、満6歳の就学時には両耳が完全に失聴した

昭和7年3月18日（財）鳥取盲聾学校ろうあ部中等部第5学年卒業

昭和8年3月18日鳥取盲聾学校ろうあ部研究科終了

※中等部第5学年卒業後、教師になりたいと思い、東京ろう師範に入学したいと遠藤董校長（1代目校長）へ相談。遠藤校長が直々上京し手続きを取ったりし、親身も及ばぬ世話をした。しかし、突然、口話教育に急変し募集中止となった。そして母校の研究科に残り木工工芸に専念し、工業試験場にて指導を受け研究した。

昭和8年4月1日／鳥取県立代用鳥取盲聾学校木工部助手（4年間無給で木工助手として勤務）

昭和12年10月25日／鳥取木工株式会社入社（後に火災で焼失）

昭和20年5月1日／鳥取市潮工業株式会社入社（職長となる）

昭和21年4月／鳥取盲聾学校木工部助手

※昭和23年3月31日／今西校長のすすめで認定講習を受け、教諭となる

昭和43年4月／厚生文化賞受賞（第17回全国ろうあ者大会・於 福島県）

<ろうあ者団体関係の活動>

会長・副会長・役員（幹事）合わせ、約20年間ろうあ運動に尽力した

平成11年（1999年）2月／病気のため死亡／84歳

【故田中正治氏の歴史(まとめ)】

永年、地元鳥取県下のろうあ者福祉運動を指導し、その精力的な活動振りは目をみはるものがある。

身体障害者手帳の発行を思いつき、1948年(昭和23年)の身体障害者福祉法制定の際、地元出身の某代議士を通じて政界に働きかけ実現したのもそれである。

その他、自転車バックミラーを、ろうあ者に無料で交付させたり、1955年(昭和30年)には、ろうあ者専任相談員の設置を県に働きかけ、粘り強い交渉を続けた結果、専任相談員にろうあ者を採用させるなど、ろうあ者福祉の向上に多大な功績を残している。

また、鳥取県ろうあ団体連合会の発展にも献身的に動いており、会長として地元のろうあ者福祉の発展に努めた。

第1回厚生文化賞受賞(第17回全国ろうあ者大会福島大会)

鳥取県立鳥取聾学校教諭としても、長い間教壇を取っていた。